

2007年記録会は8月19日(日)武蔵野グリーンパーク(9:00~12:00)です!

2007年記録会は9月16日(日)大宮田んぼ(9:00~12:00)です!

この号が出る頃にはウクライナの「世界選」も終わっています。今回の開催地・ウクライナはFF模型の先進国のイメージがあり、様々な意味で期待をされていましたが、期待は外れたようです。先進性は機体に関するノウハウ、製作技術、競技能力に限られているようで、会場の整備や運営については全くベツモノだったようで、難しいものですね。民族性でしょうか……。

次の開催地はユーゴスラビアから分裂したクロアチアとのことです。FF世界選の開催地はなぜか東欧諸国が多いのですが、ドイツ、フランス、イタリア、オーストリアでの開催は出来ないのでしょうか。

日本ほどではなくても、牧草地や草原がなくなっているのですかね。ハンガリー大草原(200km×300km)様な格別な場所はそう、あるわけないのかも知れませんが、日本では田んぼを走り回っていますが、まだまだ恵まれているのかな……。考え方、変えにゃ……。

## 記録会報告

2007年6月記録会 / HLG

2007年6月記録会 / PLG、

2007年7月記録会 / HLG

2007年7月記録会 / PLG

ウクライナ世界選速報集

## お知らせ

まったけ大会案内

日本選手権案内

## FFサロン

レイノルズ数の話4・石井英夫

翼端投げF1Bの可能性・石井満

PLG倉田号の紹介

HLG-B製作のヒント

## 雑談天国

天才英雄・チャンピオン

## 編集後記

## 2007年6月記録会の結果(HLG / CLG)

### 6月HLG記録会報告

平尾……

私は前回欠席したのでグリーンパークは1年ぶりだ。幕張メッセで高速に入り首都高を高円寺で降りて環八をすこし北上し、みどりの多い五日市街道をぬけて、おおよそ一時間でグリーンパークに着く。

グリーンパーク近くの桜並木のトンネルはいつ見ても素晴らしい。さて朝の八時、今日の公園はわりと空いていて、天気予報と違って少し気温が低く、やや風もあって涼しい。来ている選手はもうセッセと練習している。毎年のことだが、グリーンパークでの記録会は安らぎのひとつである。この公園の良い所は広場が広い事、木陰が多いこと、トイレがある事、デイリーストアーが近いことである。しかし、最も素晴らしい事は、大勢のFFモデラーが集うことだろう。最低でも30人、多いと50人以上も集まるので、様々なヒコーキが見られる。そしてFFの変人もバラエティーに富んでいるが……。

この日行ってみると、我々ヒコーキ屋が陣取る大木の周りがナンと「バーベキューコーナー」に指定されて入れない。公園としては多くの人に使って欲しいとの意向だと思うが、ヒコーキ屋としては「ヒコーキ以外は来ない方が望ましい」と云う浅ましい根性があるので止めて欲しい。しかし、やむなく2本の小ぶりな木陰にバラけて陣取ることになった。天気予報では「快晴、微風」だが、けっこう風がある。もともとここは気流が悪く「ヒコーキが飛ばない公園」なのに、この日はさらに「ヒコーキが落ちる気流」の日で8割が下降気流。スゴイ高度を取る選手でも「あー、あーっ」と叫び声につられてミルミル降りてくるのだから、30秒飛ばすのが大変、「こんなのタマランなー」

さて、競技の方は、いかなる気流でも、とにかく高く上げるしかないのが、この日は圧倒的に強肩に有利な日。そうすると吉田、井村、稲葉、相沢、小川、大八木の各選手、それと当日発見したしい肩をしている小林選手、さらにこの日一番の注目株は「あれっ」と云う投げ方に変えていた今関選手、へた投げ(下手投げ)で結構な高度を取る。これはさっそくやってみねば……。見ると完全なアンダーローで地面スレスレから真上に投げ上げるのだ。本人に何故かえたのか聞いてみると「肩を壊したから」だそうで、機体の調整は野球投げと同じだそうです。今回はこれで挑戦だ。

さて、勝負の結果は、この日唯一のパーフェクトを出した井村選手が優勝、スバラシイ。2位はナンと

下手投げの今関選手、3位は大人しめに投げる小川選手、4位は2人いて稲葉選手と快調の相沢選手とききました。6位にジリジリとランクを上げてきている三俣選手、7位は紙を飛ばしている有望株の小林雅選手が来ました、8位に紙の平林(弟)選手、この日よく上がっていた。9位に同じく紙を投げていた吉田選手。この日の紙の参加者は6名、内5名が10位以内に入る成績は立派です。

6月HLG記録 6月17日グリーンパーク 晴 23 ~ 29度 風 1 ~ 3 m/s 40秒MAX 5/10投

NO	選手名	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10	計	F1	合計
1	井村真三	34	40	40	40	21	38	23	39	40	40	200		200
2	今関:健一	40	30	39	13	40	40	20	28	16	19	189		189
3	小川 昇	40	35	37	33	28	18	40	33	13	28	185		185
4	相沢泰男	30	40	17	05	40	30	33	24	26	31	174		174
4	稲葉 元	19	33	20	40	14	24	27	40	34	22	174		174
6	三俣 豊	21	19	40	19	26	40	17	22	32	36	170		170
7	小林雅文	08	33	24	25	35	14	25	38	37	25	168		168
8	平林久乃助	04	27	40	27	33	18	24	23	04	38	165		165
9	吉田利徳	24	40	32	30	29	18	18	21	14	32	163		163
10	林 道義	35	28	24	16	28	21	18	15	23	39	154		154
11	菅野俊行	18	15	13	27	23	25	33	14	28	40	153		153
12	平尾寿康	24	16	36	23	17	25	28	29	26	30	149		149
13	大八木重信	29	16	16	40	05	12	05	22	13	22	129		129
14	三田祐一	13	13	19	27	12	18	06	13	15	14	92		92
15	木立猛彦	05	15	06	08	05	11	13	13	16	09	68		68
16	池田 昇	26	23	12	06							67		67

紙  
紙  
紙  
紙  
紙

6月PLG記録会報告

河田・(平尾)……

梅雨の合間の好(荒)天に恵まれ、21名の参加者で楽しい競技会でした。先月同様、下降気流とサーマルまかせで格差のついた結果となり、F・O制したのは松戸クラブの会長林さん、2位は松戸クラブの礼儀正しい工藤さんでした。最近腕を上げてきた光が丘クラブの原さんが3位でした。(河田)

公園のような狭い所での競技会には、大宮たんぼとは違った感覚が必要です。ガンガン上げればイイ大宮たんぼと違って、風の方向や強弱、心の隅のどこかに引っ掛かっている「機体の喪失をどうする？」等については公園族は解決済みですが、吹っ切れてない大宮たんぼ派は勝てないのですね。

HLGでもこの日の気流で好成績を出すのは至難の業と思ったのですが、なんとパチンコはフライオフになっているので、高度を取ると安定していたのでしょうか。21人中17選手が150秒超は立派なものです。又、この日の参加者の半分くらいは名前を知らないの地元でしょうか。そのおかげで、多分今年最高の参加数、21名を記録、競技中の空はヒコーキがイッパイ。雑談も多く、相当賑やかだったと推察します。

6月PLG記録 6月17日グリーンパーク 晴 23 ~ 29度 風 1 ~ 3 m/s 40秒MAX 5/10投

順位	選手名	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10	計	F1	F2	合計
1	林 善明	40	40	40	40	40						200	36	24	236
2	工藤陽久	26	36	40	33	31	40	40	40	39	40	200	26	19	226
3	原 国光	17	24	26	40	16	40	35	40	37	40	197			197
4	八木博典	34	23	40	40	09	40	40	25	24	22	194			194
4	芝田栄三	40	29	20	17	34	26	40	40	40	19	194			256
6	河田 健	35	34	16	40	23	12	40	40	27	24	189			189
7	小野博男	06	40	27	06	14	16	40	40	24	40	187			187
8	平林久幸	26	26	40	40	40	10	40	15	05	15	186			186
9	斉藤竹彦	35	33	24	38	28	30	33	40	25	27	179			179
10	岩淵康司	35	40	11	20	14	21	17	08	36	40	172			172
11	倉田泰蔵	40	17	31	14	35	33	26	30	37	35	170			170
12	三辺雄司	32	15	40	38	40						165			165
13	梅沢久男	03	25	21	15	40	03	11	11	36	40	162			162

13	斉藤政宏	28	25	32	27	40	23	35	20	16	26	162				162
15	高橋了治	40	21	19	08	39	28	19	21	26	25	158				158
16	山岸茂夫	25	21	18	18	12	25	09	28	34	40	152				152
17	岡田光正	35	25	20	29	32	20	23	24	30	24	151				151
18	斉藤パパ	27	09	26	40	23	24	16	14	16	22	140				140
19	嘉部 保	31	25	24	14	26	24	31	14	16	19	137				137
20	長島 登	17	17	17	14	37	10	25	12	10	12	113				113
21	瀧島林之助	25	13	15	10	17	12	29	17	09	25	88				88

## 2007年7月記録会の結果(HLG / CLG)

### 7月HLG記録会報告

平尾……

梅雨で2回流れて、3回目やっとの事で成立したグリーンパークの記録会です。この日は幸いにして涼しい朝で、10時半頃まで気分良く飛ばせました。競技が延び延びになって紙の競技会とかち合わせて過ごい人数で、投げミスで人に当てたりして、迷惑をかけましたが無事終了しました。

気流の難しいこの場所としては、この日の条件は良い方。大サーマルによる場外も無く、かと言ってバタバタ落ちる日でもなく、飛ばしよい記録会になりました。この日は紙の選手が多く、そのせいか各選手の高度はそれ程の差がないのが以外でした。と言うことは投げミスが即、成績につながったと言うことです。紙ヒコーキは上反角が大きい分旋回安定が実によい。上空でねばるが、機体が重いので滑空速度が早く低高度でのネバリがない。バルサ機の方は10メートルくらいまでスイスイと降りるが、下の方で来てからガンバル感じです。

さて、成績の方は、意外にもオールマックスは無し。小川選手の公園用ヒコーキはやや華奢ながらもなかなか優秀で、この日はしだいに調子を上げて4マックスまでいき192秒でひさしぶりの優勝。2位は昨年から復活して会長？に飛ばしている相沢選手が3マックスの184秒、3位は優勝をねらって散々ねばったものの、結局サーマルにケツをまくられて2マックスでの182秒の井村選手、相変わらずの安定した投げは健在です。4位につけたのが、安定した投げで高度も取る、優勝間近の稲葉選手、投げの精度はもう一踏ん張だ。今日は美声を聞かせないで静かに飛ばしていた池田選手が5位、6位はこの日紙を飛ばして好調だったが、もう1つ運に恵まれなかった平林弟選手。ここまでが150秒超でした。

7位は最近仕事が忙しくなって、且つ、ヒコーキの役員でも多忙な吉田選手、その上に体調に黄色信号が点滅したしたとか……。仕事はソコソコにしてヒコーキで頑張れば大丈夫だ。8位は大事にしていたジープンがついにポロ布になって新調ジープンで頑張った三田選手、この日はまだズボンが馴染まないのかマックスはなし。9位は2人いて、ヒコーキもよし投げも良いのだが、あと一味足りない三俣選手、もう一息(酒か女か?)で「乗る」ののだが……。もう1人の9位は、どうも見たことがあるヒネタ初心者風の人、途中で思い出しましたよ、ナンと3年ぶり川口選手、ナカナカ良いヒコーキを飛ばしていたが投げが決まらない、そりゃーそうでしょう。3年ぶりではね……。

10位は前回驚異の下手投げを披露した今関選手、この日は前回と何かが違っていた。その他では地元の参加者がチラホラ、しかし、紙のジャパンカップがあるので、そちらにエネルギーを取られて、ランチャーズの方は付録扱いでした。

### 7月HLG記録 7月29日グリーンパーク 晴30度 北風1~4m/s 40秒MAX 5/10投

NO	選手名	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10	合計	F 1	F 2	総計
1	小川 昇	32	25	28	40	25	40	29	40	28	40	192			192
2	相澤泰男	15	27	26	40	40	25	36	40	28	05	184			184
3	井村真三	25	18	24	35	40	25	36	40	31	26	182			182
4	稲葉 元	33	24	24	27	27	13	24	37	40	33	170			170
5	池田 昇	40	27	24	31	30	33	22	34	25	27	168			168
6	平林久乃助	20	20	29	26	40	29	28	04	08	13	152			152
7	吉田利徳	28	33	21	18	27	35	21	21	19	24	147			147
8	三田祐一	34	24	25	03	37	24	18	18	24	19	144			144
9	三俣 豊	32	15	24	24	28	32	14	20	20	23	140			140
9	川口幸男	25	18	04	16	12	24	29	26	36	09	140			140
11	今関健一	21	29	19	27	16	26	24	12	18	36	136			136

12	平尾寿康	14	10	19	27	26	13	13	11	25	13	111		111
13	岡村貞二	25	19	17	18	16	15	15	05	12	11	95		95
14	木口雅之	19	18	28	20	04	01					89		89
15	山本和文	17										17		17

## 7月PLG記録会報告

河田・(平尾)……

グリーンパークのPLG記録会は3連続松戸勢の優勝となりました。成績は下表を参照してください。  
(河田)

河田さん、このところ負け続きで、ふてくされてレポートを書く気も薄れ、今回はたったの1行です。

狭い公園での記録会は、なんと言っても松戸勢慣れてますからね。広いところで育った河田選手にとっては、何か勝手が違うのでしょうか。広々として気流のイイ所で育った根性無しのヒコーキは、悪気流にもまかれるとすぐギブアップですよ。グリーンパークみたいに狭くて根性の悪い公園では、機体は重めの気流に鈍感な奴が勝つのですよ。かと言って松戸勢が「鈍感な奴」とは言っていないので、誤解の無いように……。この日は松戸から7名の軍団が押し寄せて、戦う前からまけそ……。

さて、競技の方は松戸・工藤選手と河田選手の2人が残ってのフライオフは10秒差で工藤選手の勝ち、両選手の打ち上げは、完璧だったのですがね。ま・こうなるとパンツです。ウンが付くこともある……。

3位は、冷やかして参加の岡田選手が2秒落ち、4位は松戸の会長・林選手の4秒落ち、5位は多分地元か松戸の井上選手、倉田選手は、エライ小型のパチンコ機で180秒はイイのか悪いのか……。

後は村上選手が1マックスながら161秒とここまでが150秒超でした。

## 7月PLG記録 7月29日グリーンパーク 晴30度 北風1~4m/s 40秒MAX 5/10投

順位	選手名	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10	合計	F1	総計
1	工藤陽久	40	40	30	35	40	40	40				200	60	260
2	河田 健	40	40	40	28	40	40					200	49 50	250
3	岡田光正	09	37	40	40	40	30	40	38	27	28	198		198
4	林 善明	31	30	32	40	36	40	33	40	40	35	196		196
5	井上恵?	40	27	36	28	35	34	22	40	08	20	185		185
6	倉田泰蔵	35	27	40	34	40	36	04	37	17	27	180		180
7	村上 守	28	26	36	40	22	28	13	23	29	14	161		161
8	嘉部 保	05	25	23	11	28	33	33	11	28	11	147		147
9	小野 博	08	18	20	25	05	24	30	37	28	23	144		144
10	吉岡靖夫	04	18	20	13	20	14	14	28	32	34	134		134
11	梅沢久男	12	30	10	40	25	05	04	09	03	18	125		125
12	勝山 彊	05	23	32	10	14	04	08	18	15	25	113		113
13	広瀬光紀	11	24	18	19	23	08	08	20	16	17	104		104
14	斉藤清憲	10	23	22	20	03	22	02	07	12	13	100		100

## 2007年フリーフライト世界選手権競技会速報のまとめ

平尾……

この速報はランチャーズホームページに選手団のメンバー(金川団長以下、各団員)及び中継の和田さんが書き込んだレポートをつなげたものです。時間のない選手団からの現況報告なので、時間的な不揃いや多少の齟齬は生々しさの証拠と理解し、楽しんで下さい。

## 日本選手団からのご挨拶 2007.6.14 団長

早いもので2005年フリーフライトアルゼンチン大会から2年経ちます。いよいよ2007年世界選手権が6月24日からウクライナのオデッサで開催されます。2年に一度の模型飛行機競技会の最高峰である世界選手権には、今回は過去最高の39カ国、サポーターを含めて500名近い選手団が集り、主催者がこの大会にかける意気込みは相当なものと思われます。過去最大級の世界選手権で、誰もがチャンピオンになりたいと強く思っているでしょう。この競技で世界最強のウクライナは、個人、団体が当然のこととして優勝を狙っています。我々日本選手団もすばらしいメンバーが揃いました。F1A3選手は若手の白井、生駒、田久保選手。ベテランの田岡、西澤選手と新鋭の吉田選手を擁するF1Bチーム。そしてF1Cはベテランの関澤選手が1名と世界チャンピオン枠での出場となる金川。そしてサポー

ターは、チームを応援し世界最高のレベルの競技をこの目で見てみたいという谷塚さん。そして西澤、関澤両氏の奥様方も参加されます。

さまざまなハンディーを持つ日本チーム。前哨戦となるBlack Sea Cupには各国の選手も練習を兼ねて大勢出場するようですが、我が日本チームは残念ながら最短のスケジュールでの参加で、ぶっつけ本番で臨みます。総勢11名の日本チームはこれらのハンディーを乗り越えて、最高の舞台で思いっきり力を出し切ってきます。残念ながら、今回は前回アルゼンチン大会の時のような現地からのリアルタイムの報告はあまり出来ませんが、競技に差し支えない範囲で現地からの情報を送るよう努めます。皆様の「ガンバレニッポン！」の声援を受け、力いっぱい戦ってきます。

### 第1報 2007.6.23 ウィーン、オデッサ

ウクライナでのインターネット接続に苦労しており遅くなりましたが、現地より速報を続けます。ウィーンの朝は、空港のカフェでカプチーノとアップルトルテから始まりました。

とにかく美味しかったこのデザート。リッチな気分のまま今日はウクライナ/オデッサへ向かって日本チーム出発！オーストリア航空のゲートに行くとディズニーランドのアトラクション待ち状態！なんとか無事に出国審査も問題なくクリア。さあ、飛行機に乗りいざウクライナへ！と気合十分なF1Bの吉田さん。しかしこの直後に嫌なものを見てしまった。機体ケースがカーゴで運ばれてきた。飛行機に積み込み作業が始まった。ケースが空を飛んでいるのではないか！そう言えば、ケースを預ける際にも方向関係なし！まったく注意書きを見てないのか？英語が読めないのか？全員あきらめ状態のままウィーンの空へ…。

ところで写真にはありませんが、ウクライナ航空のお姉さま達はとびきりの美女でした。さすが美女の国ウクライナ！約1時間30分間の空の旅を楽しんだ後、とうとうやってきました！フリーフライトの聖地ウクライナ/オデッサに到着。しかし小雨交じりの曇り空、ここでの入国審査も無事にクリア。空港の外は蒸し暑い蒸し暑い！チャーターしておいた小型マイクロバスで本日の宿泊先へ移動。

### 第2報 2007.6.25 オデッサ

ウクライナの交通マナーは想像していたようにでたらめ。おまけに旧式のソ連製自動車LADAがあちこちで故障。そのせいで道路はあちこちで渋滞発生。そんな中でヨーロッパ製高級車がビュンビュン飛ばして追い越しをかける。バスドライバーのドライブマナーも良くない。やっとの思いで到着した宿舎で難問が待ち構えていた。6部屋予約のはずが5部屋しかないとのこと。11名で奇数のため、団長一人で泊まれると思ったが、とにかく5部屋しかない。ウクライナ語しか通じないのでちががあかない。どうもすでに泊まっている中国チームが7名で奇数であるため一緒に泊まれとのこと。そうこうしているとスタモフからの電話。「中国選手と一緒に泊まれ」とのこと。「外国の知らない選手と一緒にではチームの行動も違うし習慣も違う」と言うと、「メイン宿舎チャバンカでは外国人選手が相部屋でも泊まっている。同じベッドに寝ると言っているわけではないので何の不都合があるの？」とのスタモフの言い分。とにかく宿舎のおばさんからむりやり6部屋分を確保した。「もし中国選手が来なかったら一人で泊まっても良い」とスタモフが言う。その後中国チームと宿舎で合流。なんと通訳の若い女性がサポーターとして参加していることが判明。彼女はすでに一人部屋ですでに泊まっている。スタモフがいう中国選手と相部屋にしろということは、男女が一緒になるということで、彼女いわく「絶対無理！無理！ありえない！Impossible」。団長の私も同感。結局、団長はいまのところ一人部屋。

夕食もレストランは午後8時までとのこと。ところが宿舎到着が午後4時半ころ。部屋のことでずったもんだで部屋割りが終わったのが午後5時過ぎ。食事を6時からスタートして7時までに終了してくれとのリクエスト。「どうして？」と聞けば、一般客が大きなパーティーを7時からスタートして夜中の12時まで行うそうだ。「主催者側は選手の宿舎をどのように考えているの？」とだんだんと怒りがこみ上げてくる。「でもこれがウクライナ流」と考えなければ、これでは体がもたない。到着第1日目にして心身ともに疲れきってしまった。いったいこの先どうなるのか不安でしょうがないが、こんな状況でもやらなければならないのが世界選手権。気持ちを切り替えて明日からやろう！

宿舎はこれがウクライナかと思うほど設備が素晴らしい。でも食事は不合格。第1日目の夕食は現地通貨の両替できなく、アルコールなしの寂しいものになるところであったが、救いの神が現れた。メイン宿舎に泊まっているはずのオーストリアF1C選手のトラッペさんがたまたま我々の宿舎を見学に来ていた。どうにかビール11本分の現地通貨に両替してもらい、ビールで乾杯の夕食ができた。少し幸せな気分。オデッサ到着からいろいろあったが、24日早朝からF1Aチームは宿舎前の原っぱで練習予定。24日は受付、機体検査、開会式と忙しい。世界選手権のスケジュールがいよいよスタートした。では日本の皆様おやすみなさい！

### 第3報 2007.6.25 オデッサ

開会式は連日のビュービュー風がこの日も続きました。ウクライナ流に 1 時間遅れでスタート。セレモニーはいたってシンプル。恒例の儀式として、前回チャンピオンがステージに上がるということで、これも最初で最後。良い記念になりました。さあ、明日からはこちらに来て初めてフィールドで飛ばします。はやる気持ちを抑えて時差ぼけの体を休めます。25日。5時に宿舎からバスでフィールドへ。練習日ということで出足もまばら。6時前でも2メートル程度の風。フィールドは確かに広いが、方角によってはやはり制約がありそうです。適当な場所に陣取って練習スタート。7時ころまでは確かに肌寒いがそれを過ぎると強烈な太陽の良いお天気。そうこうしていると風がだんだん出てきました。3~4メートル。そして10時ころから瞬間で8メートル以上。コンスタントに4~5メートル。甘田や板倉ではこんな風では練習をしていないため、久々の強風下での飛行とあって特にグライダーは勝手が違うようだ。SCATのニュースで、「オデッサは2~3メートルの良いお天気です」との情報は一休誰が書いたのか。

BLACK SEA CUPももっと強風下で行われたとのこと。こちらの予報でもF1A、F1Bの競技日は強風の予報。7~8メートルの風が出そうとのことでは先が思いやられます。機体回収の体制をしっかりとしないと大変なことになりそうです。 日本選手団



夕方に行われたマネージャーミーティングで競技についての説明が行われましたが、我々がフィールドを去った午後3時ころでもフィールドには本部のテントもなければ、一切の準備がなされていません。「これで

明日から競技が始まるの？」と心配してしまいます。これもウクライナ流か？明日からいよいよ競技が始まります。白井、生駒、田久保選手に声援をお願いします。

### 第4報 2007.6.25 オデッサ

開会式は強風の中、39ヶ国の選手及び大会関係者約400名の盛大なものであった。いるわいるわ、ウクライナ美人！足は細くて色白、スタイル抜群しかも可愛い！写真写真とデジタルカメラのフラッシュの嵐……失礼しました。気をとりなおして、レポートを続けます。

その中には、いろいろ話題多い北朝鮮チームの姿も見られました。全員日に焼けた真っ黒い顔・顔・顔……、練習量の多さと共に今回の世界選手権に賭ける想いがヒシヒシと伝わってきました。その夜には風は収まり、明日からの公式練習は穏やかになることを信じ、各自準備に入りました。

練習日当日早朝、窓の外を見ると木々の揺れも全く無く、絶好の一日になるかと思いフィールドへ到着したが、前日と同じ風速5~6m/s、時には10m/s前後の強風の一日であった。

F1A・F1B・F1Cの各選手大小のトラブルはあったもの明日から始まるの選手権に向けて準備万端でフィールドを後にしました。F1Cの世界チャンピオン金川選手は淡々と予定を消化、初参加のF1A田久保・生駒両選手、F1B吉田選手は考えていた予定は消化したものと見えた。世界選手権ベテランのF1B田岡・西澤両選手、F1C関澤選手は貫録の予定終了。ロシアチームのマカロフ&コチャレフの両選手から情報収集にあたっていたこの私は、コチャレフのホルダーをして二人で強風の中デートしてしまいました？デートをスクープされた写真はご覧のとおり、詳細は帰国後に記者会見します。さあ、明日から世界一を決める暑い4日間が始まります。まずはF1A日本代表田久保・生駒そしてこの私の3名が挑戦します。皆様のご声援宜しくお願いいたします。ウクライナ/オデッサ駐在、白井特派員からの近況報告でした。

## 第5報・競技中断 2007.6.26 オデッサ

あわや世界選手権中止？ F1Aの競技が始まりました。早朝は無風。フィールドへは早めに到着したが思わぬ落とし穴。練習日に使っていたフィールドにはすでに何台かの車が来ており、練習を開始していました。ところが本部らしきものは全くなし。前のメールでも書きましたが、トイレや本部テントなど全く昨日から変化なし。カナダチームも来ていたが「どこが本部だ？」と不安げ。グライダーを飛ばしている人たちもいるがどうも様子を変だ。プリテンを再度読み返すと、スタート地点が2箇所あることを知る。今までの世界選手権ではフィールドが2箇所あるなどということにはなかったので、団長の思考の想定外。チームマネージャーミーティングで明日の出発は南風に対応して、練習日とは全く異なる地点だとわかった瞬間、パニックとなってしまふ。団長の責任で1ラウンドに間に合わないとなると前代未聞の異常事態発生。大急ぎで出発地点に移動をするが不安でならない。レンタルのバイクの借りる場所は別の所。

とにかく仕事を割り振って選手だけはスタート地点に間に合うように移動させ、どうにか間に合って大急ぎで準備開始。7時スタートだが45分前くらいにどうにか間に合った。この時点ではほとんど無風の良い天気。大急ぎで白井、生駒、田久保選手の順で準備を開始。どうにか1ラウンドに間に合って白井選手から発航。離脱は良かったが早朝7時からすでに気流は非常にトリッキー。下降気流につかまりMAXは取れなかった。非常に難しい気流で1ラウンドでもかなりの選手がMAXを取れない状態。これがオデッサの気流なのか？3ラウンドあたりからコンスタントに風が出てきて、昨日と状況は全く同じ。

4ラウンドあたりで8メートル位の風。スタモフは風の心配をして競技中断を気にしていたが、ここで前代未聞の「異常事態発生」。競技が中断されたのは強風でも悪天候でもない、人的なトラブル発生。

広いフィールドでも畑があり、その中をある国の回収班が車で麦畑を走ってしまった。それを見た農家が激怒。収穫前の麦畑を車で荒らされたので本部に怒鳴り込んできた。5ラウンドはスタートしていたがTMの緊急招集。理由を知らされ再開はUN KNOWN。このまま世界選手権はキャンセルかと思わせる状況に突入。

1時間位経って再度TM召集。農家の説得はうまくいき、結局F1Aは4ラウンドで中止。翌日のF1B競技は予定通り明日に行われ、明後日にF1Aの5,6,7ラウンドとその前にF1Bのフライオフを行うという変則的な競技運営。南風は天気予報どおりかなり強く明日も同じとのこと。結局レンタルのバイクは50ccのスクーター。こんなものでフィールドを走れるわけもなくおまけに中古。中国チームも1台借りたが使う前からトラブル。われわれも2台借りたが1台だけしか用意しています。アルゼンチンのホンダのバイクとは大違い。借りたバイクが全く使えなく回収の足でやるしかない。すべてがウクライナ流。トイレも地面に穴を掘ったものがたったの2箇所。FFはすごい技術だがレベルはかなり低い。競技は白井選手が1ラウンドを落としたもののその後はMAX。生駒選手は日本出発直前に右手の骨折でうまく飛ばせない状態。田久保選手も日本と勝手が違うのか気流の読みが難しい。昼過ぎにすべてを終わって生駒選手の機体がタイマートラブルで現在捜索中。このメールは本来もっと後に送る予定が競技が終了したためCHABANKAから午後2時に送っています。生駒選手の機体が見つかるかどうか？競技が明後日に再開で気分一新で残りのラウンドに挑戦します。ここでビッグニュース。北朝鮮は旧式の機体で参加していますが、飛ばしこんだ機体と訓練された選手はずばらしい飛ばし方をしています。約100名の選手で4ラウンド終了で25名程MAXしかいませんがチームで1位の成績。2名がMAXとは驚きです。

以上いろいろ書きましたが慣れないPCでメモ帳しかなく、誤字脱字、改行など見苦しい文章をお許しく下さい。

### \* F1A 追加報告 2007.6.30

こんばんは、ウクライナ/オデッサからの報告です。F1Aの競技が始まりました。開始 30 分前の空の状態は、全体的にサーマルがあるようで安定した気流だと感じていた。各選手が本番前に一度気流を確かめ、手ごたえを確認した。午前 7 時 00 分F1Aの競技開始、一番手は、この私が暫く待ってスタートした。

この頃にはすでに 3m/s程度の風が吹きはじめていた。操作性と獲得高度で有利と考え、ショートモデルを選択、数回のサーキングのあと離脱させ上空へ機体を送り込んだが、途中で下降気流に吸い込まれMAXは取れなかった。次に二番手の生駒選手、世界選手権出場数日前に右手を骨折、しかし、根性でファイト一発！ あれっ？機体から何かキラキラ光る物体が…。ハントの衝撃で尾翼は真っ二つに割れヒラヒラと…。生駒選手も落とした。世界選手権デビューの田久保選手に期待がかかる。サポートの谷塚さんとフィールド内のサーマルを探し回って離脱！ ハターンも決まりMAXと思えたが、吸い込まれ、MAXならず。前日の夜、田久保選手が一言、「俺って結構本番に強いからね！」。2ラウンドあたりからそろそろ本格的に風が強くなってきた。各選手とも強風の中、持てる力を駆使してラウンドに挑戦したが、4ラウンドを終了した時点で田久保選手1MAX、生駒選手1MAX、そしてこの私は3MAXと不本意な途中結果とな

った…。日本のみなさん、ごめんなさい！主催者側の都合で本日は4ラウンドで終了、続きは明後日となりました。

今回の世界選手権で多くのことを学んでいます。初出場の生駒選手は、3ラウンド目にタイマーの作動不良で上空視界没となった。本人は7ラウンド分のMAX時間を1ラウンドにまとめちゃいました？と言ったかどうかは…。そのときの機体はまだ飛んでいるかも？二人目の初出場である田久保選手は、「すべてにおいて勉強になった」と宿舎で何回も連発！そこで教訓、「クッシーさんは凄い！」明日からのF1Bに備えて早めのおやすみとなった。明日も引き続き応援をお願い致します。さて問題です。田久保選手と谷塚さんのラウンドでの出来事を紹介します。その中で何故このようなことが起きたのか考えて見てください。正解者の中から抽選で世界選手権のお土産をプレゼントさせていただきます。

【問題】強風ラウンドの中、田久保選手は谷塚さんにサポートをお願いしていました。そこでホルダーも兼任していた谷塚さんは田久保選手の「1・2・3」の掛け声の後「4」で田久保選手のサポートを終了しました。何故でしょうか？

#### 第6報 日本F1B チーム優勝決定(和田) 2007.6.28 オデッサ

現地より電話速報、F1B日本チーム チーム優勝 7ラウンド フルマーク、フライオフ進出者が参加全体で4名という非常に過酷な中で、日本は各選手がそれぞれ6マックス達成した。西澤、吉田選手が同タイムで6位、田岡選手が18位と個人成績が決定しチーム優勝が確定した。競技自体は継続し、明日フライオフが行われる。

#### F1Bチーム優勝は検査も終わり公式記録であることを確認済み(和田)



F1Bチーム優勝は検査も終わり公式記録であることを確認しています。

心配する方もいらしたようなので現地に電話確認しました。

連絡時はちょうどF1Bフライオフの真っ最中だったようです。

日本チーム

は余裕の見学でしょう。これが終わると、すぐにF1Aの後半ラウンドのはず、ガンバレニッポン！！！！それにしても大会のホームページがまったく更新されない。リザルトも載らない(最低)ので、誰がフライオフに残ったのかも判らないのは残念。現地からの今晚の詳細レポート待ちましょう。

#### \*F1B 追加報告 2007.6.30 オデッサ

こんばんは、ウクライナ/オデッサからの報告です。先日のF1Aに続きF1Bの競技が始まった。当日は激しい雷雨とともに宿舎が停電となり、朝5時出発前の予想もしない出来事でバタバタのスタートとなった。フィールドに到着して間もなく、いつもの風が吹き始めた。F1B日本チームの三人、田岡・西澤・吉田各選手は普段どおりの動きで自分達のピットを作り上げていた。さあ、いよいよ競技が始まる。3人とも順調にラウンドを重ねるが、風も強くなってきた。遠くに見える空の色が黒くなり、雨の予感！とうとう競技を一時中断することが各国チームに伝えられた。

数時間の中断のあと競技開始。残る3ラウンドがんばれ！…ニッポン チャチャチャ！あとは皆様の知っているとおり、チーム優勝！やった！世界選手権 F1Bチーム優勝 JAPAN！。前回アルゼンチンF1C金川選手優勝に続きにまたまた世界チャンピオン誕生！日本チーム田岡・西澤・吉田各選手の笑顔をご覧ください。田岡選手は帰りの車中で「今日は2本ほど飲んじゃおうかなあ」と嬉しそうに話していました。

この日の回収チームもこれまた凄かった！360度変化した風の方向、徒歩による回収、山あり谷ありの疲れる一日ではあったが、世界チャンピオンチームをサポートできた喜びを感じながら今夜はおやすみなさい。回収の合間、石の上で休憩していた田久保さん曰く、この土地はハエが多いね。身体に群がるハエ



を追い払うが、またやってくる。そこで本日の名言：「ハエが飛ぶスピードは、やっぱり早エなあ…？」 まあ、こんな調子で仲良く楽しんでます。

#### 第7報 2007.6.29

F1Bは世界的に見ても日本のレベルは高く、個人成績も過去には小堀選手、中田選手の上位入賞がありました。今回は団体でいきなり表彰台の中央に立てる1位の成績を獲得しました。今回の世界選手権はまだ終わっていませんが、今までの世界選手権で経験しないことばかりです。天候、競技運営、宿舎の問題など、詳しいことは帰国してから皆さんに詳しく報告をしますが、特に強風で風向きがクルクル変わり、そのためのスタートラインの大幅な変更など、少ない数の選手団で競技を行う上では非常に過酷なものでした。使えるはずのバイクが全く使えず、回収班の労力は相当なものでした。早朝ラウンドからトリッキーな気流でしかも強風。田んぼで静気流での練習しかしていない日本チームは大変苦勞しましたが、後半のラウンドは気流も安定し、本来の力を発揮してMAXを取り、個人の2位、3位を取ったウクライナチームに対して3人が上位の成績の日本チームは団体優勝をすることができました。

こちらからの報告がすんなりできない理由は、宿舎にインターネット環境が整っていないためです。メインの宿舎ではできるので、競技合間を利用して行いますが、食事、睡眠のことをい考えるとなかなか時間が取れません。そのような理由で報告がうまくできませんことをお許しください。想像以上に悪いウクライナの状況では仕方ありません。F1Aの様子は次回にということで、明日は最後のF1C競技です。強風では機体の回収がカギです。明日もきっと強風で、風向きがクルクル変わることが予想されます。スタートラインの変更や、さらに夏場特有の雷雨が連日発生しており競技中断も予想される中、選手団の皆さんは最後の力を振り絞って一致団結して競技を行います。

世界選手権は個人競技であるとともに、チームが団結しないと成り立たない競技です。がんばりますので皆様の応援をお願いします。

#### 第8報 2007.6.29 オデッサ

29日のF1C競技は比較的良好な天気の中行われ、7分フライオフまで消化した。現在残っているのは、ウクライナのバベンコ選手と日本の金川選手の2名。あす早朝に10分フライオフより競技が再開する予定。フライオフには28人が進出、5分フライオフで15人、7分フライオフで2名に絞られた。

PC環境不良により現地から直接リポートが出来ず、申し訳ない。以上現地 田久保選手より日本時間30日5時13分電話にて報告あり。

報告のように金川選手は現世界チャンプの実力をいかに発揮して、現在2位確保。現地30日早朝から競技再開ですので日本時間本日昼過ぎには最終結果が出ます。相手はバベンコですので実力はまったく互角だと思われます。応援をよろしくお願いします。

#### 第9報 2007.6.29 オデッサ(和田)

現在回収に向かっている田久保選手からの息を切らせながらの電話連絡によると「金川さん準優勝。バベンコのほうが少し高かった。バベンコは9分半飛んでいる。金川さんの正式タイムは回収に出してしまったのでわからない」30日12時27分入電。以上の報告がすべてです。すばらしい成績でした。

#### 第10報 2007.6.30 オデッサ

世界選手権の競技は最終日を迎えました。天候に悩まされ続けたオデッサでの世界選手権でしたが、29日のF1C競技は本来のオデッサの天気となったようです。晴れて風も比較的弱かったものの、終日3メートルから6メートルの風で、風向もめまぐるしく変化しました。ピットの移動はあたりまえのことです。F1Cは風に流される距離が大きく、回収は非常に困難でした。連日の競技で疲れきった仲間が回収をするため、選手も中間地点まで急いで機体を引き取りに行くことになり、選手の体力消耗も非常に激しくなりました。団長の私は機体回収中に後ろからグライドして来た機体に気がつかず、主翼が足に当たりました。F1Cの強靭な主翼のDボックスが完全に折れる衝撃でしたが、足の怪我はそれほどでもなく、当たった場所が良かったため大事には至らず、その後も競技を続けました。

競技は関澤選手が二つのラウンドを落としましたが、私は投げミスがあったもののサーマルに助けられました。28名がMAXで、午後7時45分から5分MAXで行われ、その後8時45分から7分MAXのフライオフが行われました。7分をクリアしたのは地元の強豪BABENKO選手と私の2名です。

翌朝30日に10分MAXのフライオフが行われましたが、BABENKO選手は地元とあって、時間前からスタンバイして準備万端です。我々はバスでの移動で泥んこ道で立ち往生するのではと不安になりながらも、どうにか間に合って到着。彼の機体はギアモデルで折りたたみ翼、機械式タイマーにRCDTという構成です。それに対して私はギアモデルで普通の主翼の私の機体。電子タイマーは装備しているものの分が悪すぎます。発航は彼が先でしたがパターンが悪くこれで勝ったと思いましたが、彼にとっ

てはラッキーなオーバーラン。その後RCDTさせ次の機体の準備。私はその直後に発航させました。

エンジン回転がもう少し欲しかったのですが早朝でうまく回りません。しかしながらパターンは決まって一安心。時間ぎりぎり予備機を飛ばしたBABENKO選手の機体はパターンも決まり、ギアと折りたたみの組み合わせでは歯が立ちません。結局1分近い差で2位。

終わってからいろいろな方が握手を求めてきました。地元ウクライナは全てを知り尽くしているのに対して、遠く日本から来て始めてウクライナのフィールドで飛ばす日本チーム。機体を比べてみても誰の目にも明らかな差がある中で、「良くやった」という気持ちが伝わってきます。その後厳しい機体検査も無事終了で、ここで正式に2位が確定しました。

1週間に及ぶ非常に過酷な世界選手権も、このF1Cフライオフで競技が終了しました。悪天候で競技を消化できない場合にはどうするのかと心配しましたが、予備日を設定してあったため予定通り終了することができました。明日のオデッサ出発の準備をしながら夜の表彰式、バンケットを待ちます。F1Bのチーム優勝という快挙。そして前回チャンピオンの私としても2位という結果を出せてホッとしています。団長として厳しい状況の中でこれだけの成績を出せた日本チームを誇りに思っています。選手団一同、皆様の日本からの応援に感謝し、お礼を申し上げたいと思います。これでオデッサからのレポートは終了したいと思います。選手団団長

#### \* モンゴル中国北朝鮮他の様子 2007.7.4 日本

世界選手権の状況を日本でいろいろ想像しながら皆さんが気をもんでいる様子は、帰国してあらためて知りました。時間的余裕がある中で、正しい状況をお伝えしなければならないと思い、ここで説明をしたいと思います。

1. F1Cで金川が一番上に書かれているので成績も1番ではないかと?という疑問について。世界チャンピオンのステータスは別格です。どのような理由にせよ、世界チャンピオンになれば、開会式で前回チャンピオンということで皆さんの前で紹介されます。またゼッケン番号もトップです。F1Aの場合チャンピオンは100番でその後国別のアルファベット順にアルゼンチンから101,102番と番号が決まります。F1Bのチャンピオンは300番でF1Cのチャンピオンは500番です。予選でMAXをとれば常にチャンピオンは一番上に表示されていますが、予選落ちした段階で初めて下のほうに位置づけられます。ですから予選通過、5分、7分をクリアーしていますので、この段階までは一番上に表示されているわけです。

2. モンゴルが参加しているが、ガンゾリグさんはどうなったのか?について。確かにエントリーをしていることは知っていましたが、エントリー締め切りまでには彼は現れませんでした。その後フィールドでバツリ。しかも当初の4名程度のメンバーではなく、彼ともう一人の協会関係者(幹部)の2名でした。

結局ウクライナへはビザの関係で入国できず、モスクワへ引き返して大使館へ掛け合っとうにか入国ができたのはエントリーが終了した後でした。飛ばすための機体も準備したが、正式な飛行は結局でませんでした。非常に残念だったと思います。モスクワで3日程度滞在をしなくてはならず、しかも宿舎がキャンピングサイトでレンタカーも借りられず、どこかのチームのレンタカーに乗せてもらってフィールドへ。でもバンケットもどうにかチケットを購入して参加していました。来年はぜひ日本から大挙してモンゴル大会へ(今回で正式なFAIメンバーとなった)参加して欲しいこと。悪天候は28日の午後の練習日にもフィールドを襲い、竜巻による強風(風速50メートル近く)、雹、雷で機体を壊されたチームや、キャンプサイトは相当な被害があったそうです。フィールドに置きっぱなしの放送用のスピーカーもやられてしまい、結局、スタート合図はそれ以降パワーメガホンになってしまいました。

3. 中国チームはあまり元気がありません。フルチームではなく20年前の勢いはありません。個人主義でFFで食っていく選手はいません。ある程度の余裕がある選手がやっているのですが、真剣さが全然ありませんが、団長はずっと李さんでした。通訳の女性(LuLuさん)は正式な通訳ではなく、航空協会の英語ができる職員ということで、ラジコン競技の世界大会などにも通訳として同行しているそうです。

4. 今回のハイライトは北朝鮮チームです。ちょうど日中友好大会が華やかな頃の中国チームとそっくりです。団長の下で一糸乱れぬ行動で非常に奇異に感じます。選手は若手でアスリートそのものです。

機体の回収は飛ばした選手が行います。すごい視力で双眼鏡は不要。トランシーバーやビーコン、GPS装置などのハイテクは一切無し。走って回収に行き、ちゃんと自分の機体を見つけて走って帰ってきます。全員が異常なくらい真っ黒に日焼けしていますが、強化合宿をやっていたと思われそうです。

機体は確かに20年前くらいのイメージですが、飛ばしこんだ機体は非常に安定性が良く、特にF1Aは意外にもカーボンを使った翼で強風でもびくともしない安定性で、マカロフのハイテク機体を使いこなせない選手以上にすばらしいものがありました。ラジコンは今のところ高すぎて参加はできないでしょうが、FFの世界選手権には今回の参加をきっかけとしてきっと出てくることでしょう。今の参加チーム

で、本当に真剣勝負で参加する国は、機体を開発して商売につなげているウクライナやロシアと、おそらく北朝鮮しかないでしょう。きっと怖い存在になると思います。そのほかはあくまでも趣味として楽しんでいる国です。

5. デンマークのKOSTERもエントリーしていましたが、機体の調整がつかず飛ばしませんでした。彼が20年前には常に最先端を走っていましたが、それを今ではウクライナのBABENKOや VERBETSKI選手がやっているという感じです。VERBITAKYは弟子のBABENKOに道を譲って、彼自身はフラップ翼で勝負をするようで、折りたたみはBABENKOに任せたという感じです。

以上断片的ですが、皆様の疑問や興味のある点について分かる範囲で説明しました。団長金川

#### \* 帰国報告 2007.7.3 成田

本日(3日)午前8時過ぎに無事成田に到着しました。田久保、谷塚さんはウーンでもう1泊して4日の朝に帰国の予定です。オデッサからのガン箱、スーツケースをスルーチェックイン(直接成田で受け取る)して、紛失や破損を心配しましたが無事手荷物を受け取りました。

オデッサ出発に際しての最後のハプニングを紹介します。午後3時出発に対して時間の余裕をみて10時に宿舎を出ましたが、途中で後のタイヤがパンクをしてしまいました。スペアタイヤはあるのか？スペアの空気圧は充分あるのか？心配でしたが、ドライバーが手際よくタイヤ交換して、確かにスペアタイヤは磨り減ってツルツルでしたが空気は入っていたようで一安心。どうにか空港に到着したときは力が抜けてしまいました。これでウクライナを脱出できる。飛行機が飛び上がればウーンへたどり着ける。離陸した瞬間うれしさがこみ上げてきました。

12日間におよぶ、かつてなかったほどのハプニングの連続の世界選手権。これほどいろいろなことが起こった大会はいままで経験したことがありません。団長として、また選手として、前回チャンピオンという大きなプレッシャーの中で、F1Bチーム優勝という快挙を経験できたことはとても幸せです。

また、私自身のF1C2位という成績を残せたことも良かったと思っています。今回の日本チームの大健闘は全員ががんばったおかげだと思います。祝勝会などについては今後考えますが、とりあえず9名が無事に帰国したことを報告します。選手団団長

#### \* 追記:中国FF界のその後 2007.7.4 高田富造

中国チームの栄枯盛衰はドラマですね。意外に早く1960年代にはソ連から学んで世界のトップ水準に到達していたそうです。教師になったのは日本の航空模型の影響を受けた第1世代たち(FAI窓口の黄永良さんなど)、当時澆刺と練習に励んだ第2世代たち(郭浩洲さんたち)、その運命も文化大革命で砕かれました。文化大革命の収束に向かうとき、地方に下放させられ所在もわからないなかで、搜索し救出する努力がわずかに残った幹部(黄さんはその一人)たちによって、献身的におこなわれました。郭浩洲さんは農村で粟拾いしていたそうです。

そして1979年アメリカのタフトに現れたのです。急速に回復できたということは彼らのももとの到達点をあらわしているのでしょう。この大会で日本チームにコンタクトを取ってくれました。まだ外事法の縛りが今の北朝鮮並みの時代の中、勇気があったものです。

このときの選手たちは第2世代でしたが、彼らは教練となり各地で第3世代を急速に育てました。そして1986年の第1回日中友好競技大会です。1979年の驕りが打ち砕かれた大会でした。日本のFFが飛躍的に進歩した画期的なできごとでした。また競技への根性を学んだのです。彼らは国家の厚い庇護にありました。社会主義国の体育選手そのものの条件でした。彼らのクライマックスはたぶん1993年の第7届全国運動会(四川省)だだと思います。そのあと全国運動会の種目からも外されました。

この大会でF1B団体優勝の天津の王文礼くんへのご褒美は家1軒だった。各地の拠点、航空運動学校も自分でカネを稼いで暮らしていくことになったのです。経済の開放とは荒々しいものです。各地の選手は、模型店を始めたり、模型製作会社を興したり、自活の道を探りました。二足の草鞋で選手活動は大変だったと同情します。河南省のF3Bチームがオランダまで列車で向かい息絶え絶えで試合にならなかったのはそんなときでしたね。北京にも選手が始めた模型店がありますが、武士の商法であきまへん。素人が始めたRC店は大繁盛です。模型製作も初めだけで尻すぼみ。サラリーマンになったり、他の事業に転進したり散々なようです。

現在はかろうじて模型航空の意地を保っている皆様がなんとか続けている様子です。FF完成機の販売も本家のロシアが商売を始めたらコピー品は売れません。今後の展望としては、案外素人さんたちの台頭が期待できないかと思っています。RC店を見ても、その購買ぶりはすさまじいです。カネがあります。日本やアメリカのようにカネのある人々が趣味として熱中したら展望があります。これが第4世代にならないか楽しみです。たしかにカネ、カネの時代ですが、豊かさは趣味に向かうと確信しています。RCにない高尚なFFに気づいてくれたらうれしいです。しかしアメリカでもFFからRCへの転向が

見られます。FFの運営に変化が必要なのかも知れません。

## \* 2007年世界選雑感

今回の場所については、開催以前からスカット上で多少の不安が報ぜられていましたが、予想に反することはママあることです。しかし、それにしても「出来事」が多すぎた感があります。運営の拙さと連日の強風という不連続きの中で、何とナンとF1Bの団体優勝と言うビッグニュースが入ってきました。

又、このコンディションの中で金川選手が競技の最後まで残ったの準優勝は「サスガ」です。これで「全てヨシ」です。

### F1A・参加者105名はスゴイ

F1Aは強風やトラブルで中止になったりしながらも、フライオフに19名もが残ったのはカーボン機のおかげでしょうか。優勝はオーストリーのホルズレイトナー選手、2位はボスニア、3位はエストニアの選手はいずれも地元と言えるでしょう。グライダー王国の旧ソ連はマカロフ選手が7位が最高でした。

日本勢は振るいませんでしたが、競技が初日の事でもあり、且つ、生駒選手の出発直前の腕骨折のアクシデントや、田久保選手の準備不足ながら「今回、まずは参加してみよう」との積極的な意志を考えると、精一杯頑張ったと言えるでしょう。でもいつもの白井選手の色好みは反省が必要かな。マックス率では、ハンデイのある1Rは別にして3Rで24名が脱落している。3、4Rは魔のラウンドであり、これは競技では常に注意すべきですが、どうしても中間でタルミが出ます。仕事の集中力を調べるクレペリン検査でも、最もミスが増えるのは中間時間帯です。回が進むにしたがってサーマル読みが熟練するはずですが、そうはならないところが人間の業なのです。はじめは慎重に、終わりになると気を取り直してガンバル、しかし、中間時間帯はキンチョーが切れる選手が多いので、逆にここがねらい目なのですが。その他では、今回の北朝鮮のガンバリは驚異ですね。うわさでは旧式と言われる機体でここまでガンバルのは立派としか言いようがありません。結果としては個人で1名がフライオフに残って11位、あと24位と58位、団体で5位でしたが、国の状況を考えてこれはスゴイ部類でしょう。

3選手が参加した国としては日本は最下位でした。中国は1名のみの参加で38位でした。リストを調べると我々が盟友・モンゴリアのガンゾリグが参加していないようで残念です。チーム名もなかったのはトラブルに巻き込まれた為に競技には参加できなかったようです。

### F1B・参加者99名

この日も風に恵まれなかったようで、フライオフは4名と激戦でした。フライオフは5分、7分と2回やって優勝はクラコフスキーの連勝、さすがに強い。2位はウクライナのピヴチョール、3位もウクライナのザスタベンコとなっています。99名参加の選手の内どれくらいの選手がハイテクカーボン機なのか、興味のあるところです。注目の日本選手は西沢、吉田の両選手はもうチョイの頃で入賞まで行って、ナンと団体では堂々の優勝です。やるもんだね……。団体2位と3位の差は3秒しかありませんが、1位と2位の差は68秒もあるのですから立派です。これは日頃の訓練のせい、イイ機体を沢山買い込んだためか、はたまたゴムが良かったのかは帰国してからの報告で聞きましょう。それにしてもうらやましい。私の時は、自分のドシのせいで5秒差の団体4位に泣きました。

マックス率は3Rで32名/99名のみと大きく落ちています。日本もここで落とされています。ゴムの場合、最終的にはオールマックスはわずか4人になっています。中国は3名がエントリーしていますが、最高が29位、団体で15位、北朝鮮も3名参加で団体26位でした。写真で見る1時代前の機体か。

### F1C・参加者70名

この日はどうやら本来のオデッサ日和りだったようで、比較的飛ばしやすかったようです。しかし、日本選手は連日の競技で疲労の極に達して、ハードな競技だったようです。日本からの参加者は、残念ながらディフェンディングチャンピオンの金川選手と関沢選手のみでした。関沢選手は練習不足からか49位でしたが、さすがは金川選手7ラウンドマックスを達成。フライオフに28選手が残り、F1ラウンド5分マックス及び、F2ラウンド7分マックスを通過して、地元の強豪パベンコとの9分マックスでの一騎打ちとなり、惜しいところで準優勝となり連勝は逃しましたが、安定してさすがに強い。

エンジン機は性能に余裕があるのでマックス率は80%と高い。この日は比較的気流もよく、5Rで9名しか脱落していない。トータルでは40%(28人)の選手が残った。さて、有名な他の選手では、ベルベッキーが45位は意外……。彼も古い選手ですから世代交代ですかね。デンマークのコスターも参加していたが競技では飛ばさず選外。国別では、北朝鮮がフルエントリーと頑張っています。共産国では金持ちはいない決まりなので、貧しい国なのに国としての豊かさを表現する勝つしかいのだが、F1Cでも団体で7位と頑張っている。中国は自由化の影響かF1Cの参加は1人のみで、日本と同じです。

## その他

日本における世界選ブームも7月に入って一段落した感じですね。日本も昔はお金がなくてフルエントリー出来なかったが、今では生半可では勝てない事が解ってしまったので参加者減なのかどうか。

欧州での競技を見ると地元ヨーロッパ勢有利は明らかです。遠隔地・日本から参加するには、当然ながら、それなりの準備が必要でFF勢も高齢化が進んで体力減退が顕著になると、選手団の構成を変えるのは当然のことである。最も体力の必要な回収であるが、費用的には選手1人当たり+1万円程度でまかなえる筈なので、今後の年令編成から考えて現地編成の回収班が望ましい。今回のオデッサの場合、横浜が姉妹都市だったので現地回収班の編成にぜひチャレンジしてみてかった。しかし、ま・選手がそこまでは必要ないとの意識だったし、今回のF1Bのチーム優勝という結果なので、その判断が正しかったわけである。

今回のFF世界選をウクライナでの開催にこぎつけて、実際の運営を受け持ったスタモフ氏の苦勞は計り知れない。氏は閉会の挨拶で涙ぐんだようであるが、今回の大会は開催前から様々な評判が飛びかって、且つ、不幸な出来事が重なって運営に難渋した様である。天候不順は仕方ないとしても、ウクライナの未発達な通信網や、人材の不足等乗り越え無事に世界選を閉会までもってきたスタモフ氏の努力に、心からの賞賛を送りたい。本当にご苦勞さまでした。

次の開催国はクロアチアらしいが、国土は九州の1.5倍、人口450万人の小国である。日本へはまぐろ、ワインなどで60億円の輸出国で、円借款約1000億円。現地への進出企業はトヨタ、マツダ、オリンパス、ホンダ等がある。日本は経済大国なので当然クロアチアにも在留邦人がつくる現地組織があり、連絡を取れば様々な情報が得られる。調べたところ、日本クロアチア協会が特別に強力な応援をしてくれそうである。クロアチアは昔はベニスの支配下にあったカトリック国で「残された秘境」と言われる自然の美しい国で、且つ「アドリア海の秘宝」と呼ばれる海岸線がある。現地ホテルは日本からでも予約が出来るが、日本人の場合、オデッサと同じで宿泊費は現地人の5倍くらい取られる。問題はこの国のどの辺りで大会が開催されるのか、知っている方は教えて下さい。

## お知らせ

### 平成19年度まったけ大会案内

1. 日 時 2007年9月23日(日) 午前8時30分～
2. 開催場所 鈴鹿市池田町タンボ  
場所、<http://njb.virtualave.net/web/cffc/index.html> の“鈴鹿会場”をクリックしてください。会場案内地図が示されます。
3. 種 目 エンジン機(E級・F1J) 2分max 5ラウンド  
グライダー(G級・F1H) “  
ゴム動力機(R級・F1G) “  
ハンドランチグライダー 1分max5R(各ラウンド2回のうち上位タイム)  
小型混合級 1分max 3ラウンド
4. 参加費 1種目2000円、2種目参加の場合は+1000円、ただし中学生以下は無料  
参加費は競技当日に各種目の実行委員にお渡し願います。
5. その他 競技中の事故等については、参加選手各自で対応する。天候等の理由によりラウンド数を変更することがある。作業中の農家の方々には、こちらから積極的に挨拶してください。デサマには必ず火縄落下防止装置をつけてください。小型混合級はスパン30インチ以下、ゴム重量10g以下の機体なら何でもOK。
6. 連絡先 中部FF会長吉川 広、実行委員E級・F1J吉川 強、G級・F1H佐藤宏彦  
R級・F1G吉田 潤、ハンドランチ掛山吉行、小型混合級竹内栄重

### 平成19年度模型航空フリーフライト F1A, B, C日本選手権要綱

- 主催 日本模型航空連盟  
期日 平成19(2007)年11月2日(金)3日(土)4日(日)  
会場 千葉県香取郡干潟町万歳  
種目 フリーフライトF1A, F1B, F1C、  
参加資格 日本国籍を有する選手権期間中有効の模型飛行士登録者および日本航空協会が

選手権委員長	発行する当年度有効の FAI	スポーティングライセンスを所持している外国人。
競技委員長	日本模型航空連盟	会長 落合一夫
陪審員	FF委員会	委員 吉田 利徳
申込方法	日本模型航空連盟	理事長 落合一夫
締切日	所定の参加申込書に必要事項を記入し期日までに参加費を振り込む。なお、いったん納入した参加費は理由の如何を問わず返却しない。	
参加費	平成19(2007)年9月7日(金)(消印有効)、	
同伴者	22,000円(1種目)(2泊)	
食事	同伴者の宿泊を斡旋する。1泊につき8,000円を参加費に加算して申し込むこと。第一日夕食および第二日夕食は参加費に含まれる。同伴者については一泊につき一回の夕食が含まれる。期間中の夕食以外の食事は各自で調達すること。	
参加受理表	参加申し込みを行った会員には、参加受理書を送付する。	
受付	11月2日(金)16時~17時30分に宿舍本部に書類を提出する。時間内に到着出来ない場合は予め連絡する。	
選手の責務	選手は他の種目の役員となる。出来ない場合には代理人を立てる。	
競技方法	競技は2007年発効のFAIスポーツ規定に準拠。	
損害賠償	人畜、土地、建物その他に損害を与えた場合は、当該選手が全額を負担する。	
宿舎	国民宿舎飯岡荘千葉県海上郡飯岡町荻園 1437 0479-57-2661	
日程	11月2日(金)16時~17時受付、17時30分開会式及びミーティング、18時夕食 11月3日(土)F1B競技、11月4日(日)F1A、F1C競技、及び閉会式	
連絡先	各団体のFF委員又はFF委員長 金川茂 0476-28-4108(夜間) 又は、FF委員会事務局 吉田利徳 090-1119-9527(携帯電話)	

## FF文化サロン

### 「私説」レイノルズ数の話 その4

石井英夫……

#### 最適縦横比の問題

近時、FF競技機はおしなべて、とくに国際級種目においては著るしくロングスパン傾向が目立つようになってきました。最近の競技会風景での高性能ぶりを見れば、主翼のロングスパン化、つまりハイアスペクト化が技術進化の方向であることは明らかです。しかし、翼面積規定の方は変わらないのですから、翼のロングスパン化は翼弦長の減少、レイノルズ数の低下を意味するわけで、そんなにレイノルズ数を下げてしまって大丈夫かという心配が出てきます。そこでレイノルズ数問題と直結する関係にある最適縦横比問題を扱って、レイノルズ数の話の総括としたいと考えます。

最適縦横比(最良縦横比ともいう)には構造強度的なものと同様のものがあります。空力的最適縦横比が問題になるのは、低レイノルズ数の模型翼だけです。主として用途とか実用性とか構造強度などで縦横比がきまる実機世界のほうには、空力性能のためだけなら縦横比に上限はありません。しかし模型翼のほうでは、かりに構造強度がOKでも、これ以上翼スパンを伸ばすと性能がかえって悪くなりますよ、という分岐点があります。増大する形状抵抗と減少する誘導抵抗とがケンカする関係にあるからです。むかし、というと戦時中にまでさかのぼりますが、とくにわが国模型界では、今からは信じがたい低アスペクト翼が主流の時期がありました。当時の模型航空界の大御所、木村秀政先生の技術思想が、模型ヒコーキでは縦横比効果で性能を稼ぐより寸法効果で性能稼ぐほうがトクである、というものだったからです。木村先生設計のゴム動力機C-型(むかしのR級相当)、D-1(ウェークフィールド級相当)がともに縦横比6という幅広翼タイプのものでした。翼断面は当時としては薄翼のNACA6409で、この選択にも臨界現象への配慮が汲みとれます。いまのF1Bと同等クラスのゴム動力機でアスペクト比6はレイノルズ数60,000を超えるわけで、いま省みてさすがに時代を感じます。木村理論の影響下にあった小生などは、その後もずいぶん長いあいだ低アスペクト翼主義でやっていたものです。時代は変わって、FF競技各種目ともロングスパン化を競う時代になって、かつて木村先生をあれほど悩ませた臨界現象のオソロレはいまどうなったのでしょうか。カーボンケブラーその他のハイテク素材の活用で構造強度問題に解決をみませいか、いま各種目とも自由気ままに羽根を伸ばしているように見えます。レイノルズ数問題はどうなったのか?

まずF1Cエンジン機。近時ロングスパン化が一番目立つのがこの種目です。最先端一流モデルにおいては、あれよあれよという間にF1Aグライダーの翼スパンを追い越してしまいました。F1Cエンジン機はFF種目のなかではレイノルズ数的にはいちばん余裕がありますから、最適縦横比問題は構造的



ウクライナでF1Cを飛ばす金川選手

問題とイコールだったのでしょ。レイノルズ数的な余裕のせいか、手足ともに伸びきった超近代的な先鋭なスタイルには、空力美の極致という感じがします。

前にも書いたように小生この種目に実技経験がなく、翼断面などの情報にも欠けるので、縦横比問題に言及する資格がありません。それにしても、この種目高速垂直上昇時には下方から見上げて、長大な翼がガルウイングの状に下方にし

なって見えるというのはほんとうですか。

F1Aグライダー。こちらは徐々にゆっくりとですが、ロングスパン化が進行している種目です。レイノルズ数的には、まだいくら余裕がありそうなのに、一気にロングスパン化が進まないのは、ひとつはバント離脱時強度の問題と、もうひとつは悪気流時の曳航操作問題がありそうに思えます。

F1A種目は純粋に空力性能だけなら翼スパン3メートル、縦横比30までいけそうに思えるんですが、現実問題として、たぶんそんなことにはならないでしょう。競技の勝敗を決めるのは空力性能だけではないですから。

より高性能への追求に、ロングスパン化を狙いますけれど、少々ムリをしているんじゃないかと思えるのがF1Bゴム動力機種目です。主翼面積16平方デシメートルで翼スパン180センチならアスペクト比は20、平均翼弦9センチ弱、レイノルズ数でいえば、 $Rn33,000$ ぐらいになります。このレイノルズ数値まで落ちてきますと、小生の知見ではどんな翼断面をもってしても臨界現象の危険領域に入ります。

平均翼弦長ではその位でも、まして翼端部で6センチぐらいになりますと、レイノルズ数は22,000、このレイノルズ数で性能満足できる翼断面というものを小生知りません。 $Rn30,000$ を割って高性能を発揮する特殊翼型でも発見されれば別ですが、構造強度的にはOKでも、F1B種目の最適縦横比は20まで、それ以上に長大な翼を指向するのは、空力性能的に益なしと判断します。だいたい、F1Bで長大すぎる翼は見た目にも美しくありません。見た目にも美しく見えるかどうかは合理性の尺度になり得ると、小生考えるものです。

国際級ジュニア3種目は飛ばしてHLGハンドランチ種目に行きます。ハンドランチの縦横比ががぜん面白くなってきたのは、振り投げ流の登場によります。縦横比問題だけではありません。HLG翼型の選択は下面が平らな従来型翼型に新事態を招きましたから、HLG種目は振り投げ技法の登場で全く新しい地平が開かれたこととなります。翼スパン90センチという現行規定では、そうむやみに翼スパンを伸ばすわけには行かないでしょうが、臨界現象に比較的鈍感なHLG翼型なら、 $Rn28,000$ ほどのレイノルズ数があれば、アスペクト比12ぐらいまで伸ばしても有効な筈と考えます。人力の手投げに頼るHLG機が、静止気流で1分飛ぶかどうかずいぶん長い間論議されてきましたが、その問題はすでに決着済み、といってしまうのはまだ早すぎますか？

ライトプレーン種目は見方によっては古くも新しくもある種目ですが、いまのところ競技規定も未熟、競技の定型も具わらない状況ですから、ある路線にのせて技術問題を云云することはできません。

マジメに取り組む愛好者が増えてくれれば競技も盛んになり、技術の方向も固まってくるものと考えます。ライトプレーン翼のいいところはすでに書いたように、FF模型翼で唯一つ、レイノルズ変化に影響を受けない翼型だということです。ゆえに翼スパンを伸ばせば伸ばすほど性能よくなる筈ですが、竹ひご構造という強度の問題があって、そちら側の理由で翼スパンが制限されます。それともうひとつ、ライ

トプレーンではゴム露出、プロペラ空転と、形状抵抗成分の比率が大きいですから、翼スパンを伸ばして誘導抵抗成分を値切ってみても、全機抵抗の減少にはそれほど役立ちません。小生このところ、けっこう身を入れてゴム5グラム級ライトプレーンをやっていますが、構造・重量・強度の関係から、アスペクト比は7ぐらいがいいところです。これでやっても上昇高度80メートル、滞空3分までいけそうな感触を得ています。

縦横比問題の最後がバルサCLG(パチンコ)です。バルサCLGは小生の表芸の1つですが、レイノルズ数も $Rn15,000$ まで落ちてきますと、翼型性能がすでに悪すぎ、最適縦横比がどの、という話が意味を持たなくなります。それでも、翼スパンを伸ばしてアスペクト比を増すことは、いくらかの性能改善効果はあり、翼弦長5センチのバルサトレーナーのアスペクト比5.7を7.0まで延長すると、それなりの滑空の伸びは認められます。しかし、上昇高度が落ちるので、翼を伸ばすのが有利とは言えません。バルサパチンコでは、何が何でも上昇高度優先と、どうもそれしかなうようです。

またCLG翼型については、下面平らなことが必須条件で、カンバー翼型はすべて不可です。悪女の深情けとかいうことがあります、ダメと知りつつときどき思い出して滑空魅力のカンバー翼にトライしてみるのですが、かって一度も満足な上昇パターンが得られたことはありません。風圧中心移動の少ない、下面平らなHLG翼型あつてのバルサCLGといえるようです。

### 模型ヒコーキ屋には「青空風洞」がある

気負って始めたわりには、結局うまく書けなかった私説「レイノルズ数の話」の終章に近づきます。

これを書いているあいだ、気がかりというか、いささか引け目に感じていたことがあります。それは、推測に推測を重ねて話を進めてきたことです。レイノルズ数、飛行速度、滑空比、沈下率、揚力係数、縦横比など数値は表示はしていますが、すべて実測値ではありません。そんな不確実な推測で論を進めて大丈夫か、とお叱りが飛んでくるのは当然のこと。

ですがねえ、いいわけをするわけではありませんが、もともと実体があるのやらないのやらえたいの知れないレイノルズ数という無機質な数値を、さも実体があるかのように見せかけて文章を綴るといのはけっこう難しいんですよ。さらにもうひとついいわけを加えるなら、最新のFF高性能翼型の風洞実験データなんてものは、小生の目の届く範囲には見つからないんですよ。ただし、過去にどなたかが言われたように、われわれ模型ヒコーキ屋には「青空風洞」があります。風洞実験データのようなデジタル数値データは持ちませんけれども、自身のもも同好仲間のもも含めて、膨大な量のアナログデータなら持っています。そのうえ敢えて言うなら、われわれ模型人の実技レベルの向上のためには、必ずしも絶対値データは必要ではありません。まえのよりこのほうがちょっぴりいいかな、との感触が得られただけでこと足ります。現在のFF模型界の技術レベルは、とくに国際級競技種目においては、これ以上の性能向上は神様にだって難しそう、と冗談ぼく小生いつか書いたようなレベルに到達していません。青空風洞下での試行錯誤実験の積み重ねによるもので、学界からの空力理論先導の結果でも、風洞実験結果の思慮によるものでもない、ということです。

ただそれにしても思うことは、いまここに書いているレイノルズ数問題のように空力理論方面のことは、空力専門学者さんの協力が得られたなら、ずいぶん助かるんだがな、とそのことです。現在のFF模型界は完全に旧ソ連、現在のウクライナ勢の制圧下にありますが、お国柄とはいえ、表のつながりはどうか知りませんが、あちらの航空学界とFF模型界は地下水脈では完全につながっていると小生みています。ところがわが国では残念なことに、航空学者さんでFF模型に関心を持つ方がおられない。

小生の知るかぎり、FF競技の現場に視察に見えた学者さんは過去皆無ですから、いまFF模型界でどのようなことが行われているかご存知の学者さんは居られないんじゃないですか。以下次号

### 翼端投げF1Bの可能性

2007.6.25 石井 満……

ハンドランチではいまや翼端投げが半数近くを占めその高性能が認識されました。ランチャーズ記録会ではスパン制限があるので900mm以上のハンドランチは飛ばせませんが、翼端投げのメリットが際立つのは実はもっと大きな飛行機です。ラジコングライダーではスパン1.5m、200gの機体を40m以上もぶち上げているようです。スパンが大きいほど初速が付くのが主因です。だったらこの翼端投げF1Bで使えないかと試算してみます。

空力的に計算するのは大変なので今回はポテンシャルエネルギーに注目して大雑把に考えます。

まず従来型F1Bの場合、ゴムの放出エネルギーは25kgf-m。通常の投げで初速10m/sとすると運動エネルギーが1kgf-m。合計で26kgf-mのエネルギーが高度に変換されると考えます。獲得高度が80mとすると位置エネルギーは18.4kgf-mなので高度変換の効率は71%。この効率の中には



プロペラ効率や空気抵抗などが含まれます。相当優秀な値です。一方、普段飛ばしてる翼端投げHLGは初速 35 m/sで高度 31 m上がるので、運動エネルギー 5 kgf-mが位置エネルギー 2.5 kgf-mに変換されるので効率はちょうど 50 %です。F1Bより随分効率が悪いのは上昇速度が大きいので機体の抵抗が大きく効率を下げていると考えられます。

それでは翼端投げF1Bを考えてみましょう。ゴムの放出エネルギーは同じく 25 kgf-m。スパンが大きいので初速 40 m/sとして運動エネルギーが 18.8 kgf-m。合計で 43.8 kgf-mとなります。従来型の 1.7 倍近いエネルギーが期待できます。高度変換の効率は中間を取って 60 %と考えると獲得高度は 114 mとなります。試算では従来型よりも獲得高度を 35 m近く高く出来る可能性が十分あることがわかりました。初速 40 m/sでキューンと投げて 40 m上がって速度が落ちた所でプロペラを回し今度はゴムで再度上昇させるパターンがシンプルで確実か。それともプロペラ直径を小さくしてモーターランを 10 秒以下にして投げ直後から一気に加速させF1Cの様にプロペラ停止後も上昇をさせるのか。

エネルギーの使い方は色々考えられそうです。機体形状はHLGの延長の機体に高速タイプのプロペラを付けて短時間で高度を取るタイプがエキサイティングで面白そうです。翼端投げF1B、少なくともエネルギー的には従来機を大幅に上回るポテンシャルを持っていると考えられます。あとはこの大きなエネルギーアドバンテージをどう有効に高度に変えていくかが腕の見せ所です。どなたかチャレンジしてみませんか。

## 伝説のPLG・倉田号の紹介

平尾……

20年ほど前は参加者も少なく細々と続けていたPLGも、現在では相当な人口をかかえるメジャーな競技に成長しました。打上げ時高速で飛ばすので微妙な調整が必要ですが、ほぼノウハウが確立した現在、バルサ機のみならず紙ヒコーキにおいても立派な種目として盛んに競技が行われます。

さて、バルサパチンコとなるとDr. 石井機が有名ですが、それと負けず劣らず古いのが伝説の「倉田号」です。なぜ伝説なのかというと、町のパチンコ初心者のほとんどは、この「倉田号」のお世話になった事があるからです。私が最初に「倉田号」を買ったのは20年ほど前ですが、それ以降まわりを見まわすと結構アチコチで倉田号に出会えます。持ち主に「それ、どうしたの」と聞くとほとんどの人が「倉田さんから買った」と答えるのです。初心者同士で「それどこに行けば貰えるの」といった会話すらあるのですから驚きです。それくらい倉田さんは「倉田号」を作っては老若男女に配っているわけで、その数や数百機を軽く超えていると思います。有名なPLG「倉田号」ですが図面は今回が「本邦初」の筈です。

今回の「倉田号」はスパン267mm、機体重量9.3g、主翼面積1.3dm<sup>2</sup>、翼面荷重7.15g/dm<sup>2</sup>、重心位置96%とやたらと後ろです。機体重量はやや重めで、その分風に強いはずである。特色として主翼尾翼とも翼端が丸いのがキマリで、且つ、かならず端部をオレンジの蛍光塗料で塗ってあります。飛び方はスパイラル上昇が特徴でしたが、最近では直線上昇するタイプもある様ですが、滑空旋回は小さめで気流に強くなかなか墜落しません。ですから、風が吹くと石井式・トレーナーがやられることもシバンバです。今回手元に来た機体は大きさはほぼ石井式トレーナーと同じで、諸元もほぼ同等のようです。この機体はクールチューブを使って主翼ホップアップ式のデサを装備しているので、上昇抵抗では不利ですが狭い公園でも回収を気にせずに飛ばせすことができます。その分重量もやや重めです。胴体はカーボンを使うなど全体としては高級な材料を使った機体です。

まず、胴体はカーボンパイプが先端からシッポまで貫通していて、翼台部分は芯のバルサを0.5mmのベニヤで挟むというめんどくさいことをしていますが、ここは桧でもかまいません。重りはカーボンパイプに差し込んであって外からは見えません。ノーズのクールチューブ部分もバルサで流線型に整形し、デサ用の輪ゴムも胴体に溝が切っており徹底的抵抗を似減らす努力をしています。ダンチが付く部分は全てバルサで埋めています。いや・面倒なこと、ようやるわ……。ノーズには安全対策としてゴムが付いています。翼台は3mm角の桧、それに1mmベニヤでヒンジを付け、デサが効くと胴体の板バネで90度跳ね上がります。又、ヒンジピンの頭部分もバルサで隠してあります。そこら中の中の出っ張りを隠してあり、これだと木に引っ掛かっても回収が楽です。主翼は標準的なHLG翼ですが、3枚バルサ板のはぎ合わせで丁寧に先端の桧をとんがらかしています。上昇調整は大部分尾翼でやりますが、最後の微調整は翼台に隠しビスがあって、これで調整します。図面別添

## 湘南大会推奨・HLG - B (スパン36センチ) 製作のヒント

平尾……

来年から湘南大会の競技種目が大きく変り、これまでの参加出来た中型機は全部ダメになって、まさに「小型機大会」になります。風のある日には大宮田んぼは中型機も飛ばせない場所との判断で「セ

マイ日本どうするの」ですが、今回の小型化の決断が、果たして「大英断」になるのかどうか。

模型ヒコーキ屋には、いかなる競技にも対応できるよう準備が必要です。30年は続いた湘南大会の名物・HLG競技も、来年からは小型機しか出られません。参加できるのは「HLG - B」クラスのスパン36センチ以下になりました。この寸法に決まったのは紙ヒコーキに敬意を払っての結果ですが、バルサと紙の性能差がどう出るのか楽しみです。

スパン36センチ以下となると紙ヒコーキの翼面荷重は10グラムを越すので、紙が取得高度で有利、しかし、滑空時の沈下速度とのかねあいで滞空性能がドウ出るのが注目です。ドクター石井のレイノルズ数で考えればバルサ機の翼弦8センチ、滑空速度450センチ、紙は翼弦7センチ、滑空速度500センチとするとRn数はどちらも約25,000となります。この辺りの大きさになると翼断面の工夫(フラップ翼?)や翼面積を大きくする等でプラス1~2秒を稼ぎ出すことが出来るかどうかです。しかし、小型HLGは作るのが簡単なので、3年もすると「バルサ定番機」が出てくると思うが…。

### 1. 素直な36センチスパンHLG

図面は名機「テキサス・ボ・ウィービル」を1/1.2に縮小したものです。スパン36センチ、翼面積2.56dm<sup>2</sup>、重量22g、翼面荷重約9g/dm<sup>2</sup>、要求滞空性能は40秒です。この程度の大きさではフラップ翼を採用して滑空性能の向上を計っても、上昇抵抗が増えて高度が取れない。そこで今回は、小細工をせず翼厚5%の標準的なHLG翼とした。且つ、細かいところを工夫して上昇抵抗をへらす事に注力したい。但し、小型になる分、ドウしても翼面荷重が軽めになるので、上反角を大きくし、ノーズを短かめに、テールを長くして乱気流での自立安定性を高める様にした。出来上がった機体はホドホドの大きさで、ちびた号より投げやすそうである。ランチャーズとしては、今後公園ではHLG - Bの機体を中心に競技を進めたいと思うが如何。図面別添

### 2. 36センチスパンで翼端投げ機は有利か

このサイズで年寄り用の「翼端投げ」は成立するかを検討したい。野球投げの場合の初速は20~35m/秒(時速80km~125km)であるが、スパン80センチの翼端投げでは初速は35~45m/秒(時速125km~160km)と早くなる。しかし、スパン36センチともなるとグリップから機体重心位置までの長さが15センチしか増加しないので、初速はそんなに増加しない。

過去の経験では、スパン28センチのちびた号の場合、翼端投げでは手がしびれるだけで期待するほど高度が取れなかった。しかし、機体重量25グラム以下の、スパンが42センチになると明らかにメリットがある。この事から考えると左右対称翼のスパン36センチHLGではメリットが無いと判断する。しかし、翼長を非対称としてヒンジ側の翼を22センチ、外翼を14センチの機体を見ると「イケル」と思う。

上手くすると、力があるだけのチンピラ共に勝てるのではなからうか。この場合は内翼翼弦8センチ、外翼翼弦を11センチとして左右の翼面積をそろえてやればバランスが取れそうである。チンバのヒコーキなんて吉敷氏だけが作ればよいと考えていたが、自分でやることになるとは、困った、困った。

## 雑談天国

### 天才、英雄、そしてチャンピオン

平尾……

言葉の理解は進んでも、天才とは近年まで日本には無い概念であった。なぜなら日本では過去に天才が存在しないからである。しかし、実際に日本には天才はいなかったのだろうか。天才には、英雄、芸術家、科学者、競技者等という。例を挙げればモーツァルト、メンデルスゾーン、ダビンチ、ゲーテ、ランボー、ニーチェ、ゴッホ、ニュートン、アインシュタイン、ゲーデル等々欧米では沢山いる。

さらに調べてみると日本人的には「何で…」となるのだが、コロンブスも天才であると言う。その理由を調べると何となく納得が行くが、しかし、日本人には心底からの理解はしがたい。

まず、英雄について考えてみると海外にはアレクサンダー、シーザー、ハンニバル、ジャンヌダルク、ナポレオン、ジンギスカン等々いるが、日本には国民的英雄もいない事に気が付く。と言うことは、日本人は一元的な考え方が不得意な民族ではないかと言うことである。かいつまんで言えば、日本人は人の長所を上げると同時に欠点も上げないと気がすまない民族なのである。長所よりも、欠点に目がいつてしまうのは国民性ではあるまいか。これは全てに白黒を付けたくない民族と言えそうである。

英雄とは救国の士である。又、幾多の欠点を度外視しても余りある才能の持ち主である。国内での戦いが大部分であった日本では、平清盛、頼朝、足利尊氏、信長、秀吉、家康等の英雄としてもおかしくない歴史上の人物の中で、あえて国民的英雄を選ぶとすると貴方は、誰かを選ぶか。

欧米の考え方では、「天才」には戦略や発見も含むので、不屈の意志、間違ったとしても目的に向かって突き進む偏執性も包含される。しかし日本的考え方では、まず思い浮かぶのは「彼は残酷だっ

た、しつこかった、ずるかった、運が良いだけだ」等々それぞれの人物の、どうしても許せない欠点に視点がいてしまう。では欧米の英雄には欠点は無かったのだろうか。

欧米では、まず天才を肯定する事から始まる。総合的な人としての完成度を犠牲にして、国家的貢献をするのが天才であると言うのが欧米の認識である。であるから客観性を本分として、その人間にのめり込めない日本民族には、ナポレオンを決して英雄にはしなかったと思う。

定義としては「天才とは社会的不適応者で、それを犠牲にして創造や偉業を行い社会に貢献する人間」と言うのが妥当との見解のようである。変人が天才とは日本人には納得できないだろうが。

もう一つ、天才の特質として独自性がある。独自性を持つには人間として大いなる自信が不可欠である。さらに、重要なこととして「信じる才能」が必要である。欧米では生活の一部として宗教があるので「信じる才能」が育ちやすい。神を信じ自分を信じてこそ、天才や英雄になれるのである。不幸にして日本人には、正しいことを頑固に信じる続ける才能がない。

現在、日本は世界第2の経済大国であり先進文明国でありながら、謙虚という言葉に隠れて、まだまだ世界に前例のない独自性を恐れ、外国の例に習おうとする考え方がある。日本が様々な事で独自性を発揮して、世界のトップであると主張して何故いけないのか不思議である。現在でも「オレが世界一だ」と表現すると、間違いなくマスコミがそっぽを向く。さらにあげれば、天才を認める土壌として、わが国が優れているとの自信が必要である。

そこで過去の例をいくつかあげると、発掘資料では日本の土器は世界最古であり、わが国が土器発明国と断言していい。又、16世紀にメキシコの銀が発見されるまで日本は世界最大の銀産出国(世界の1/3以上)であった。その上に当時の日本の鉄生産量は世界でもトップクラスであった。さらに当時、世界の陶器生産の50%を日本が占めていたし、一国としての鉄砲保有数3000挺は世界一だったのだ。と言うことは当時の日本は、すでに世界一の先進工業国だったのである。又、江戸時代の浮世絵を見ると人だらけだが、江戸はまさしく人口100万人の世界最大の都市であった。

この当時のヨーロッパは様々な面でアラブ、東洋より遅れていたのである。にもかかわらず、当時の日本人は外国より劣っていると思っていたし、いまだに日本が世界の大国である事を認識していない。

欧米が発展したのは、その後の事である。自惚れると言っているのではない。現実を正しく認識して、自信を持ってと言いたいのである。

われわれが冷静に「日本は世界一」と考えられるようになった時、FF世界でもゴロゴロとチャンピオンが出てくると考えるのだが……。そしてその後はぞくぞくとゴムでもチャンピオンが登場する筈である。

## 編集後記

平尾……

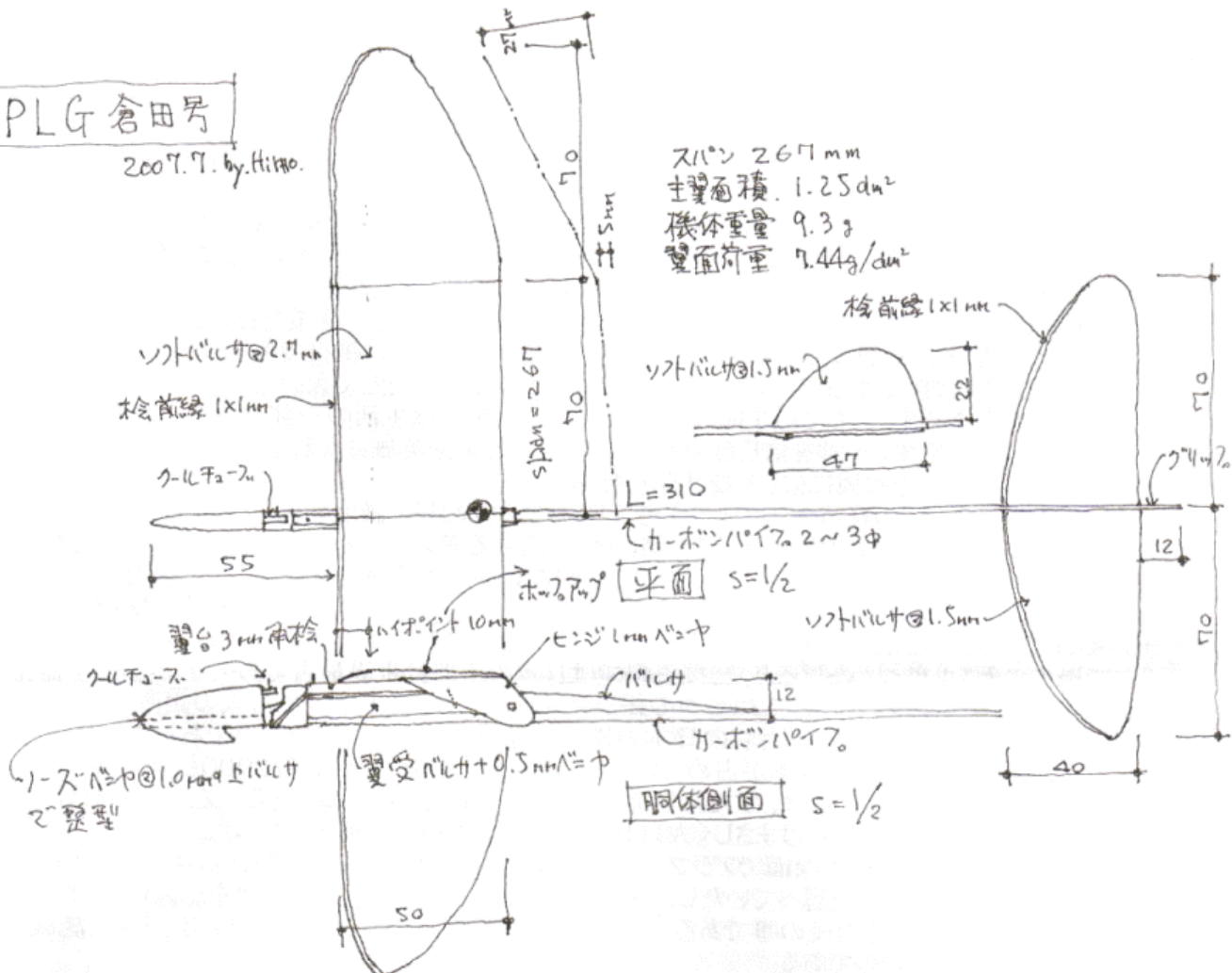
\* ようやく、夏も終わりに近づいて、もうすぐ田んぼに行けます。今年の夏は天候不順で、公園での小型機を飛ばすにしても、わずかに風が強くそれもママならず、あまり飛ばしていません。ここまでくればほんのわずか待つだけで田んぼに行けますのでガマンガマンですかね。

\* 合宿の件 今年も諸般の都合により、おおよそ20年続けてきた夏期合宿を中止とした。合宿を始めた当時は競技会も少なく、皆んな飛ばすことに飢えていた時代である。大昔には8月に御殿場で東京選手権競技会が開催されていたが、場所が悪いので中止になった。その後、KFCが静岡の富士川まで遠征してきて8月に「富士川競技会」をやってくれていたが場所が狭いので、これも中止になってしまった。そこで、競技会はムリとしても、何とか夏期に飛ばせないかと始めたのが「ランチャーズの夏期合宿」である。はじめた頃は参加者も多くも、主催者である我々も若かった。しかし、時がたってあちこちでの競技会も増え、ヒコーキ屋も高齢化で亡くなる人あり、しだいに合宿の運営も難しくなってきた。

年を取ると真夏の野原はまさに地獄である。しかも、会費は当日払いなので、ドタキャンや嵐で中止にでもなればキャンセル料で大赤字になる恐れがある。その上に、元々が「立入禁止」の場所に強引に進入して開催するという、ま・言ってみれば無謀なイベントである。以上のことは高齢化するにしかかいて心身に良くない。会長は私より10年近く若いですが、それでも無謀な企画を盛り上げるのが辛くなってきたようである。これまで皆さまのおかげで、20年も事故もなく大きなトラブルもなくやってこれたのは、まさに幸運としか言いようがない。そろそろ止め時かな……。会長来年はどうする？

**PLG 倉田号**

2007.7. by. Hirao.



**HLG-B**

2007.3 by. Hirao.

